

氏 名 松岡 葉月

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1183 号

学位授与の日付 平成 20 年 9 月 30 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本歴史研究専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 歴史系博物館における主体的学びの研究

論文審査委員	主 査 教授	久留島 浩
	教授	小島 道裕
	教授	安達 文夫
	教授	森茂 岳雄（中央大学）
	主査	並木 美砂子（千葉市動物公園）

論文内容の要旨

本論文は、「生涯学習時代」の学習理論として近年とくに注目を集めている「主体的学びの理論」が、歴史系博物館でどのように適用できるかについて検討しようとしたものである。具体的な学習プログラムを考案・実践するだけでなく、効果測定・分析（検証）まで一貫して行うという点で特色のある博物館研究になっている。歴史系博物館における「主体的学びの理論」の効果が、学習プログラムの実践や効果測定を通して検証されれば、展示方法や展示評価方法（の改善）に活かすことができ、利用者の視点に立った豊かな博物館体験を提供できるのではないかという、きわめて実践的性格の強い提言型の研究である。

序章では、博物館における「学び」のありかたを「利用者主体の学び」という観点から検討することの重要性を説き、「展示作成者の意図が伝わっているか否かではなく、利用者が展示からの情報をどのように受け取り学ぶか（利用者のもつ社会・文化的背景に基づく学びの特性を、主体的学びの理論に基づいて分析すること）」という点に注目するという、本論文全体をつらぬく考え方を明らかにしている。そのうえで、「歴史展示における学びの主体性」（1章）「歴史展示への主体的学びの理論の拡張」（2章）、「現行の学習プログラムにおける学び」（3章）、「主体的学びの理論に基づく学習プログラムにおける学び」（4・5章）という項目をたて、それぞれ1・2章では、理論的側面から、3・4・5章では実践的側面から具体的に検討・検証する。

第1章では、博物館に適用しうる学習理論および先行研究を整理したうえで、博物館に求められているものは、博物館活動への利用者の主体的参画と学びにおける主体性の確保（明確な位置づけ）だとして、「主体的な学びの理論」を適用することの重要性を説く。この理論は、構成主義に基づくもので、他からの影響を受ける側面には留意しつつも、「学び手が自分のもつ知識や経験、それに基づく興味・関心を生かして主体的に知識を構成する」ことの意義を評価するものであり、ピアジェ・ヴィゴツキーらの学習理論とそれらを博物館における学習理論に適用・展開したJ・H・フォーク、L・D・ディアキング、フーパー・グリーンヒル、G・E・ハインらの研究成果による。第2章では、こうした学習理論が、実際の歴史学習初期段階の児童による博物館体験（歴史展示を活用した学びの場）でどのように有効な効果分析手段たりうるかということ、3年生と6年生による江戸東京たても園での体験的学習後の「過去時間認識」「歴史的思考」の分析・評価に適用とする。斉藤博・小林宏己らの研究・仮説をふまえつつ、この学習によって児童がどのような道具を学習対象に選ぶかと、みずからのそれまでの知識や経験を生かしつつ「自らの時間のものさし」（過去時間認識）や「体系的な歴史認識」を獲得した、と評価した。また、博物館の側で、学び手に対して、その興味・関心、知識や経験に基づく資料選択・提供をするならば、「主体的な学び」が成立するとした。

第3章では、歴史系博物館で実施している学習プログラムについて、「主体的な学びの理論」という観点から比較・分類したうえで、国立歴史民俗博物館の「歴博探検」というワークショップ式学習プログラム、「歴博クイズ」というワークシート型学習プログラムについて詳しく分析する。前者では、主体的学びを引き出した事例に注目して、「資料そのものの観察から理解を深めさせる方法や、発見型の学習」が効果的であると、後者では、素材の観察の有効性だけでなく、同伴者とのコミュニケーションも有効であるとした。

第4章では、「主体的な学びの理論」を用いて、国立歴史民俗博物館における「わた

しのガイドブック」という学習（見学）プログラムを、第5章では、和歌山県立紀伊風土記の丘博物館の企画展示「山のくらしとなりわい」を用いた学習について、それぞれの学習効果を測定しようとしたものである。前者は、通史学習修了者である6先生を対象として「わたしのガイドブック」というワークシートそのものの精緻な分析を行い、後者では歴史学習初期段階である3・4年生を対象として、ウェブマップ（松岡氏はこれを「連想型ワークシート」と呼ぶ）の分析を通じて、展示を見たときの感想や考えのつながりや広がりについての詳細な分析を行った。その結果、前者のプログラムは、本来観る者によってさまざまな読み取り方（歴史像の構築）ができるはずの歴史展示ではあるが、経験や知識の違いを超えてきわめて効果的な学びを成立させていることを確認している。後者では、連想型ワークシートが、「主体的な学び」の分析にとって有効であるだけでなく、自らもそのなかで学びを広げていくことを確認している。

全体として、「主体的学びの理論」は、近年、博物館において求められている「主体的な学び」の実現方法、実現の度合いについての評価方法、あるいは歴史意識を形成することの持つ意味について、少なくとも歴史系博物館を対象とした場合有効であることを検証していると評価することができよう。

論文の審査結果の要旨

本論文は、博物館での教育・学習に応用しうる学習理論を整理し、研究が少なかった歴史系博物館での展示理解のありかたやその評価方法について、実証的な研究を試みたという点で、博物館における実践的教育研究という観点からも、教育学の成果としても評価できる。とくに、実際に歴史系博物館で行われているプログラムの分析や、子どもの展示理解についての詳細なデータに基づいた検討は、この分野での水準を示すものと言えよう。

この論文におけるオリジナルな点は、さしあたり以下の二点にまとめることができよう。①第4・5章における、利用者主体の学習プログラムについての実践を踏まえた分析である。前者は、歴博の「わたしの歴博ガイドブック」という学習（見学）プログラムにおける学びの特性を対象とし、後者は、和歌山県立紀伊風土記の丘における学習の特性を「概念地図」（連想型ワークシート）から評価するというものである。今後、歴史系博物館における「主体的な学び」や学びを保証する学習プログラムをどのように評価すべきかという点では、具体的かつ精緻な事例分析になっており、同時にそれぞれのワークシートが有効であることを検証している。

②博物館で今後ますます求められる主体的学びのありかたについて、その方向性や位置づけと、教育学における学習の意味づけとを、具体的な事例を用いて結びつけて考えようとしている点は評価できる。とくに、自然史系博物館や美術館では、こうした学びについての研究蓄積はあるが、人文科学系博物館ではきわめて少ない。歴史民俗系博物館を事例に、学びのあり方について評価する方法を検討したことは高く評価できる。松岡氏自身が、そのプログラムの作成や実施に関わり、自ら利用者調査を行うなど、データ収集と分析とをいわば実践的に行っており、この点もこれまでの教育学ではほとんど行われなかったことである。また、博物館研究としても新しい分野を開拓する可能性があることを期待できる。

2008年1月25日の予備審査においては、上記のような評価できる側面があることを確認したが、同時に、①論文の構成上、図表の根拠となるデータの処理方法や読み取り・説明が不十分であること、②論証するときの「理論的」根拠とする構成主義理論にこだわりすぎたため、せっかくのオリジナルな調査・分析が、構成主義理論を裏付ける（なぞる）だけに終わっており、オリジナリティが不明確になっていること、歴史系博物館において、学習プログラムを用いることにより、どのように理解が深まるかという点にさらに絞り込んで論じた方が、広く一般的な結論を導き出せること、などの点も指摘された。

こうした指摘のうち、とくに①の分析精度をあげ、説明を改善して再度提出された論文を審査したうえ、平成20年7月28日に、公開発表会ならびに口述試験を行った。そのなかで博士号を授与するに十分な研究能力と知識の蓄積があることが確認された。論文については、構成主義の学習理論の理解と応用について、さらに研鑽を積む必要があること、「主体的な学び」を考えるときには、個人の経験や知識についてのつっこんだ検討が不可欠であること、博物館における教育と「主体的な学び」との緊張関係をも含めて検討することが必要であることなどが課題として指摘された。こうした点では、さらに研究を深化すべき課題もあるが、全体としては、多くの事例を集め、ていねいな定量分析をも行って、学習理論を博物館の場で検証することに成功していることが高く評価された。今後、博物館における教育活動と「主体的な学び」との関係を考えるうえでは貴重な成果であると評価でき、博士論文として十分な内容を有していると全員一致で判断した。